

電気と「はかる」計器の歴史を訪ねて……6

夫妻と無線と蒸気動力と

松本 栄寿
横河電機(株)

前回紹介した「電気歴史のコレクションの情報源」には、個人や公共のコレクションの所在地が郵便番号順に記載されている。6ページにジップコード 02818, ニューアイランドランドワイヤレススチーム博物館がある⁽¹⁾。

この博物館は、ロードアイランド州の州都プロビデンスの近くの片田舎、ロバート・メリアム (Robert W. Merriam) 氏宅の庭にあり、夫妻と地域の同好の士によって運営されているようだ⁽²⁾。

そのコレクションは電気通信と蒸気動力が主であるが、電気技術に関する書籍2万冊も収集されている。メリアム氏は IEEE 歴史センターの歴史講話部 (Historical Speakers Bureau) の講師も務め、得意の分野は第一次大戦前の無線電信である⁽³⁾。

展示室には1900年以前の電気機器、火花式送信装置、通信用受信機、検波器のコレクション、初期の真空管、レシーバ、電鍵、カップラ、電信機器、電気計器、初期のブラウン管などがコーナ別に整理され、訪れるマニアを飽きさせない。

庭の一隅には、20世紀初期のニューアイランドランド海岸無線局が建物ごと移設されておりそれに加えて初期のゼネラルラジオ (GR) 社の測



火花式送信器のコーナ。ミレアム氏 (WINTE) は私のコールサイン (JP1UYT) を打って歓迎してくれた

定器コレクションもある。

ニューイングランドは植民地時代から織物工業の中心であり、その動力に蒸気機関が使われた。やがて蒸気機関で電気を起こし、無線の先駆者となり、アマチュアやプロの無線家も多かった。メリアム氏の大型建屋には、この地に栄光をもたらしたニコロス・プロビデンス蒸気機関工場の遺品が収納されていて、外壁にはアメリカ機械学会のマイルストン碑が掲げられている。

メリアム夫妻はアマチュア無線家で、電気の歴史に詳しい。ここで、長い間抱いてきた疑問を解きたかった。現代のコンピュータ、デジタル電子回路はすべてフリップ・フロップを基本回路として採用している。その原点はどこにあったのか。

私「発明者はエックレス・ジョンソンと思うが?」、メリアム氏「そのとおり」、私「では、エックレスのことを調べたい」

ナンシー夫人は、さっそく蔵書から『ワイヤレスエンサイクロペディア』を取り出し、p. 801を広げた。そこには写真入りでエックレス (W. H. Eccles) が紹介されていた。

1875年生まれ、南ケンジントン王立科学カレッジ卒業、ロンドン大学からマルコニー社入社、フィンスパリー技術大学学長、イギリス電気学会の無線部会会長、イギリスラジオ協会名誉会長と経歴を知ることができた⁽⁴⁾。

次に残る疑問。私「だれがいつからエックレス・ジョンソン回路をフリップ・フロップと呼ぶようになったのか。レーダ技術者か」、メリアム氏「待てよ、最初はバイステーブルと呼ばれた。電気ではなく機械、ピストン弁かも知れないよ」

疑問の半分は解けたが、半分はより深いナゾに包まれることになった。

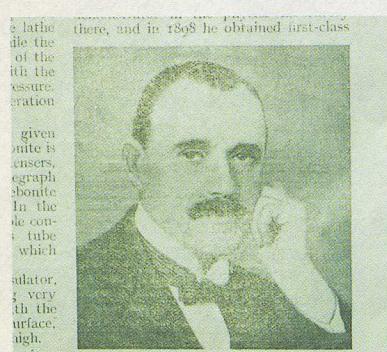
注

(1) Robert B. Belfield: *Relics of the Electrical Age*, Div. of Electricity, NMAH, Smithsonian Institution (1977)

(2) 所在地は The New England Museum of Wireless and Steam Inc., Tillinghast Road, East Greenwich, Rhode Island 02818 USA

(3) *Center for the History of Electrical Engineering*, Newsletter No. 32, Spring (1993) pp. 4/6, Historical Speakers Bureau に講師が紹介されている。

(4) *Harmsworth's Wireless Encyclopedia*, Vol. II, Fleetway House, Farringdon ST. London



Harmsworth's Wireless Encyclopedia